

---

# とある奇跡の超能力者

アカルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある奇跡の超能力者

### 【Nコード】

N1279BA

### 【作者名】

アカルト

### 【あらすじ】

学園都市に住む見た目普通な青年

普通に勉強して普通に遊んで普通に友達作って……………

そんな幸せな日々は、高一の夏休みに崩れ去る

「そう、この世のあり得ない現象、人類では決して解明するは不可能な領域、そこそが

『奇跡だ』」

あらすじはある程度物語が進んだ後また更新しますm( ) ( ) m

第一話 光行 健斗（前書き）

好評だった為に連載する事にしました  
まだ終わってない作品があるのに……  
更新は基本ゆっくりです。

## 第一話 光行 健斗

「はいここ！！テストに出るから覚えておくように！！」

世界史の授業

どこぞの征服王イス ンダルの様なガタイをした教師が声を張り上げる

と、いつか髪も髭も赤く、着ている服が白いTシャツということからキャラを作っていると考えた方がいいのだが……

「ちよつ、健斗<sup>けんと</sup>」

「ん？なんだよ」

窓側の後ろから二列目の青年が隣の青年、『健斗』に声をかける、その顔はちよつと困ったような……申し訳なさそうな顔だ

「いまどこが重要っていった？教えてくれ」

「百二十ページの下から五行目だよ、ちゃんと授業聞いとけよ」

「悪い」

どうやら居眠りをしていたらしい、青年の額には枕にしたであろう筆箱の網目模様が浮かんでいる

「んじゃ、今日の授業はここまでだ！午後から『<sup>システムスキャン</sup>身体検査』があったから、忘れんじゃねーぞおめーら」

ガツハツハとアニメの様な笑いをして去っていく教師、完全に見えなくなつてから教師内はガヤガヤと騒ぎ始める……時間をみるとどうやら昼過ぎ………休み時間の様だ

「健斗健斗、早く売店行くぞ!!」

「ん、今行く」

何人かの男子友達と一緒に売店へ走る……これは、見た目普通の高校生、『みつゆき光行 健斗けんとう』の物語

「はあ………やっぱりレベル0かよ……お前は?」

「だー!!俺もレベル0に決まってるだろ!!健斗はどうなんだよ、

健斗は!？」

「俺もレベル0、みんなと一緒にだよ」

『フクモリ落森高校 一年二組』

そこから男女問わず様々な話し声が聞こえてくる……中でも多く聞かれるのが『レベル0』という単語が多く飛び交う教室だ

「おまつ!!レベル1になったのか!？」

「へへ、レベル1の『電撃使い』だぜ!!まあまだ静電気程度程度だけだな……」

「なっ、こっちくんなビリビリ!!」

「おらおらっ、ビリビリビリビリ!!」

そんな様子を健斗は横目で見ながら苦笑いをする

恐らく少し前の世界では明らかなフィクション、もし本物だったとしたらテレビで連日連夜放送されても可笑しく無い様な光景  
手から電気を放射する学生など普通では考えられない……だとしたらその学生は『普通ではない人間』、『超能力者』に分類されてしまっ。

だがそんな『超能力』を『科学』で説明し更には『人工的に作ってしまおうぜ!!』という考えから作り出されたのがここ、『学園都市』だ。

東京西部三分の一を占める学園都市は人口約230万人、その内の約8割を学生が占めるまさに『学生の街』……いや、『学生の国』と表した方が正しいのかもしれない……

そして話は戻るが、その学園都市創設の目的は『能力者の研究』、だが能力者が掃いて捨てるほどいるのではなく、その人数は限られてしまっている。

なので学園都市は独自に開発した『能力者開発技術』を用いて実験台を調達しているというわけだ

だが能力というものは強力であれば強力である程独自の『演算』が求められ、その演算の為の『教育』をしなければならなかった  
そこでお偉いさん達が目を付けたのは『学生』というわけだ

補足で説明すると能力者というのは大きく六つに分けられる、それぞれ

超能力者 レベル5

大能力者 レベル4

強能力者 レベル3

異能力者 レベル2

低能力者 レベル1

無能力者            レベル0

と振り分ける事ができる

その中でも約6割の学生がレベル0で、最高のレベル5はこの中でも7人しかいないらしい……

ちなみに俺、健斗が通っている落森高校はそんな学園都市内でも下の下……これより下を探すのが難しいぐらいの位置にある高校だよって、能力者などクラスに二三人いれば多い方という第七学区にある落ちこぼれ高校だ

「おめーら早く席付きやがれ、レベル1程度でギャアギャア騒いでんじゃねえぞ!！」

「おせーよ」

もう終令は二十分近く過ぎてしまい、他の教室には殆ど生徒は残っていない

それなのに何食わぬ顔で教室に入って来た担任に若干怒りを感じながら渋々健斗は席に座る

「連絡は一つだ、この頃無能力者を狙った暴行があるらしいからな、くれぐれも気おつけて帰る様に、以上!!解散」

その話は健斗もたびたび耳にした事があった……何でもレベル4やら3の奴らがストレス発散の為に無能力者をボコつてるとか……自分には関係のない話だが……



「ふう、帰るか」

いつも通りの学校生活を過ごし、健斗は帰路についた

「あつち〜な」

「学園都市の力でどうにかなんねえのか？」

「いくら何でもそれは難しいんじゃないの？」

健斗が帰ろうと席を立った後話しかけて来たのはクラスメイトの二人の男子友達だった

了見は「ゲーセン行こうぜ」

二人とも同じ第七学区に住んでおり比較的家が近い

もうすぐ夏休みだということとで学校自体が早く終わり皆暇なのだ  
そうゆう健斗もどうせ帰ってもやる事が無いので一緒に行く事にした  
ちなみにそのうちの一人が今日レベル1になった電撃使いである

「おつ、見てみるよ、あれって常盤台の制服じゃねーか？」

友達が指を指した方向を見て見ると……確かに、四人ぐらいの常盤  
台生が並んで歩いている

その周りからは何というか……お嬢様オーラというのか？物凄く近寄りづらい

「いいよな〜、お嬢様……俺の彼女になってくんね〜かな〜」

「無理無理、俺らみたいな落ちこぼれ相手にされないって」

「だよな〜」

「ん？でも健斗なら」

「まあ見た目はいいと思うんだけど……な」

「ほつとけ」

確かに、自慢ではないが自分の容姿は上の中ぐらいだ、が……身長が155cmと……この学生生活、背の順では前から三番目までには入った事が無い……

「なあなあ」

「なんだよ」

「この道通るとかなりの近道になんだぜ」

友達が指を指していたのは暗い裏道、所々にゴミやら何やらが落ちていてきたない

「でも今日担任が言ってたじゃねーかよ、レベル0は襲われんだぞ、俺と健斗はレベル0だぞ」

「ハハン、いざとなったら俺の電撃で返り討ちにしてやるぜ!」

まあ悪くないとは思う、ゲーセンまではかなりの回り道になっていてこの猛暑の中を俺は長々と歩きたくは無い  
レベル1の電撃には毛程も頼りにしてないが

「うゝ、まあ大丈夫か」

「よっしゃ、レッツゴー!」

そう元気良く? 掛け声をあげて進んでしまった

よくニュースなどで『交通事故』やら『殺人事件』やらが伝えられるが多くの人間が『自分は大丈夫』だと勘違いしてしまっている。  
まあ今回は俺たちがそうなのだが……

「まったくよゝ、こんだけしか金持ってねゝのかよ? レベル0はどいつもこいつも使えねえ」

「ぎゃはは! ! なんだよその電撃? ほらほらゝゝ、ビビってんのか?」

状況は……最悪だろう

目の前には二人の能力者、恐らく一人がレベル3相当の『電撃使い』、そしてもう一人がレベル4相当の『発火能力』だろう、レベル0とされている俺たちに逃がそうとしてレベル1の友達が仕掛けたが結果は惨敗、友達は所々に火傷を負って今は気絶してしまってる。

「い、今『ジャッジメント風紀委員』を呼んだからな」

「あ？」

「お前らなんか、お前らなんか!!」

友人よ、そういう事は言わないで置いたほうが良かったかもしれないぞ、電撃使いの方明らかに切れてるし

「余計なことしやがって!!」

電撃使いの男が右腕を突き出すと目に見える程の電気が流れ、友達に直撃する

電撃の速度を避け切る事など出来ず、友達は床にうつ伏せのまま倒れてしまう、まあピクピク痙攣してるから死んではないだろうかなり痛そうだったが……

「まっ、てめえらの財布パチってさっさと逃げるか、そんな訳で消えろよ学園都市のお荷物が、てめえの金がレベル3の財布に入るんだ、光栄だろう」

そう言ってから電撃使いの方は俺に向かって電気を飛ばしてくる……このままだとやられるか？

こんな状況だ、仕方が無いかも知れない  
友達二人は……ちゃんと気絶してるよな？

「んじゃまあ、ちよつくら抵抗しますか」

「はっ？レベル0が俺等に勝てるとおもってんのかよー！」

男の手から放たれた電撃が健斗に襲いかかる、普通なら直撃だろう  
……だが……

「あたんねえよ」

その直後、確かに健斗を狙って放たれた電撃は、  
《当たる直前に枝  
分かれし、地面に吸収された》

「はっ？」

「おおすげえ、『奇跡的に』当たるはずだった攻撃が外れたぜ、怖  
かった」

「なっ、ふざけんなー！演算に狂いは無かったはずだー！」

そんな男の叫びを異も返さずに健斗はへらへら笑う

「うんうん、演算に狂いは無かっただろっさ、確かに君の答えに間  
違いはなかった」

「チイツー!!」

両腕から数多に枝分かれした電撃が弾け飛ぶ、その全ては健斗に向かつていき

《その全ては健斗を避ける様に狙いを外れる》

「今のは危なかったぜ、だけど『奇跡的に』俺は生き延びたらしい」

「ふざけんなっ!!」

今度は痺れを切らしたのか発火能力者がレベル4という肩書きにふさわしい威力の炎を放射する、約二三メートルの炎の塊は狭い裏道の全てを覆い尽くし、逃げ場のない健斗を一瞬で包み込む

「おまつ、死んだんじゃないかねえのかあいつ」

「死んでもどうって事ねえよ、どうせレベル0、ただのカスだ」

発火能力者がその場に唾を吐き捨てる

「チツ、無駄な時間使っちゃまった、風紀委員がくる前に逃げんぞ!!」

「どっどっどっ」

後ろから聞こえた声に思わず二人は固まる

そんな、あり得る筈がない……………

あの炎を喰らって生き延びる事ができる人間など自分と同じレベル4……………もしくは学園都市で七人しかいないレベル5ぐらいだ

だが健斗が着ている制服は落森高校の物、あそこでは生徒の殆どがレベル0……………高くてもレベル2程度だ

生きているなんて事……………あり得る筈がない

二人は機械の様に後ろを振り向く……………そこには……………

塵一つ付いていない健斗の姿が

「お前、どうして?」

「ん?ああ、『奇跡的に』炎が当たらなくなっつてさ、当たる瞬間に空洞みたいのが出来てさ、もう無いと思うけど」

「そ、そんなのあり得ない!!」

そう、あり得ないのだ、今の火力は男が出せる力の全力に近い、その中に空洞?当たらなかつた?そんなの『あり得ない』

「そう、『あり得ない』からこそ奇跡だ」

「くっ、ちくしょう!!」

電撃使いがありつたけの電気を放射するが、全て健斗を外れる

「一つ教えといてやるよ」

「来るなくなるな来るなくなるな!!」

二人がありつたけの攻撃を注ぐが……当たらない

「この世のあり得ない現象、人類では解明する事が不可能な領域、それが

『奇跡』だ」



「ジャッジメント風紀委員ですの、大人しく……なっ!？」

ある学生がこの頃問題となっている『無能力者狩り』の被害を受けていると連絡を受け、現場についた彼女が目にしたのはまさに『地獄絵図』だろう

ゴミやペットボトルは真っ黒な灰と化し、大量に何かが燃えた焦げ臭い匂い、それだけで高能力者が先頭をしたのだと思われる  
そして奥には所々火傷をした青年が二人、そしてもっと奥には……

「ん？ああ、遅かったね」

気を失っている男を重ね、椅子にしてこちらを見つめる青年

「そっちがのんびりやってる間に終わっちゃったよ、まあここにいる四人、病院にはこんであげて、俺はもう帰るから」

「お待ち下さいですの」

背中を向けてさっさと帰り出しそうだった健斗を彼女は自身の能力によってその道をふさぐ

「ワオ、『テレポーター空間移動者』か、これまた珍しい能力と出会えたもんだ」

「きちんと事情聴取はさせていただきますの」

「俺は被害者なんだが？」

「それとこれとは話が別ですの」

「あー、わかったよ、だからそんなに睨むな睨むな」

健斗がそういうと目の前の少女は携帯を取り出し誰かと話し始める、恐らく病院だろう

そんな事を考えてたら倒れている四人が何時の間にか来た病院関係者各位に寄って運びこまれていく……

「では話しを聞かせてもらいますので、私につかまって下さいな」

「見たところ常盤台の制服だが、よくやるな……中学生なのに、名前は何？」

「はあわたくしは第177支部所属の」

白井しろい 黒子くろこと申します」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1279ba/>

---

とある奇跡の超能力者

2012年1月3日02時58分発行